思想環境としての郷土研究

――橋浦泰雄の民俗調査――

鶴見太郎

【要約】一九二〇年代後半から三〇年代中葉とは、各地に点在していた研究会・郷土史家たちの多くが民俗学を指標に再編されていく過程でもある。当該期に柳田国男の許でその組織化の中心的担い手となった民俗学者・橋浦泰雄は併行して社会主義運動にも従事していたが、同時代の政治的対立から距離を置き、人間関係の構築も運動家そのものの誠実さを尺度とした。この立脚点はやがて民俗学者として橋浦がフィールドワークに赴く時、調査地において政治と研究を互いに混在させずに現地の協力者と接することを可能にし、イデオロギーを超えた信頼を築く要因となった。一九二六、二八年の長崎県の五島調査、あるいは一九三〇年代初頭に行われた長野県の東筑摩郡調査で橋浦の知己となった郷土史家は、東京で社会主義者検挙の報が届く度に橋浦の身を案じる書簡を送っている。これらの交流を特徴づけるのは、経験を常とする郷土研究の方法が彼らの人間関係となってあらわれている点である。一九三五年に設立された郷土研究の全国組織「民間伝承の会」の組織方針は橋浦の提言に沿ったものだが、橋浦はそれぞれの郷土で既に活動している郷土研究会を横から繋ぐ組織形態を第一とした。信頼できる郷土史家がどれだけ誠実な郷土調査を地元で行っているかに力点を置くこととなる点で、まさにそれまでの一〇年にわたる橋浦の郷土研究をめぐる経験から創出されたものでもあった。

史林　九二巻一号　二〇〇九年一月

一　郷土研究の組織化

「手段」としての郷土

一九二〇年代後半から三〇年代中葉にかけて民間学上の組織という観点から郷土研究を見ると、それは各地に点在していた研究会・郷土史家たちの多くが、次第に民俗学を指標に再編されていく過程でもある。この動向は一九三五年八月、民俗学の全国組織ともいえる「民間伝承の会」設立を以て、ひとまずの帰結点を迎えることとなるが、そこに到る約十年とは、柳田国男にとって自身の民俗学が、組織と資料的蓄積の両面においてその基盤を整えた時期でもある。

周知の通り、一九三三年に行われた連続講義「民間伝承論」において柳田は、民俗資料を三つに大別し、それぞれの属性とそれを知覚する主体となるものを対照させた。すなわち、その土地に短期間立ち寄った旅人の目で捉える事のできる事象、次いで寄寓者として相当の年月をその土地で過ごし土地の言葉に習熟した者の目・耳で捉えることのできる事象、そして最後にその土地で生まれ育った者が前代から受け継いだ感覚によってしか捉えられない事象を掲げ、これを「心意伝承」として最も重視した。民俗学の敷衍に伴ってひとつの焦点となるのが、民俗学と郷土研究の関係である。当時から混同して捉えられることの多かったこのふたつの区分に対し、柳田は別稿で「郷土」とは手段なのであって、それ自体が目的なのではないと明言している。[1] 換言するならば、心意伝承に関わる民俗事象の記録を終局の目的とする場合、それを豊富に保存している「郷土」を媒介項とすることが手近であるということである。

柳田によってなされたこの〝郷土の手段化〟は研究史上、「民俗を『郷土』から奪い去って、資料群に投入する」[2]ものとして厳しい批判に晒されてきた。この批判は地方在住の調査者に特定の課題を与えてその報告を自身の影響下にある雑誌に掲載する柳田民俗学の体制の在り方をも抽出し、この位置づけに沿いながら特定の地域に焦点を当て、柳田の組織化の事例研究を行う動向が生まれた。[3] これに重なる形で、一九三〇年代以降の転向現象を機に柳田の許へ参集したマルクス

主義者が、かつて運動家として見せた組織作りの知見を柳田民俗学の組織化に向けて活用し、成功をおさめたとする見方が先行研究において長らく定説化してきた④。この二つの動向を総合するならば、民俗を「郷土」から切り離し、マルクス主義の運動を特徴づける上意下達の体制をそのまま中央（柳田）・地方（郷土史家）という形へと推移させたのも、多くはこれらマルクス主義者たちだったと位置付けられることになる。

ここで課題となるのは、柳田民俗学の地方に対する組織化を考証する際、頻繁に登場する、中央の民俗学者が地方で「理解者」「協力者」を得る、あるいはその地方の郷土史家が外からやってきた民俗学者から「刺激」を受けるとは、何を尺度にしたものだったのかという点である。担い手となった一部の民俗学者が運動歴を持つ者だったとすれば、自ずから両者の交流は時に民俗資料を通した人間関係を超えたものになり得たのであり、そこに先行研究では捉えつくせない、思想的な往還が成立していたと想定すべきであろう。

小論の課題は、この郷土研究の再編過程にあって、とりわけ柳田の許で組織化に貢献した人物・橋浦泰雄が残した採集手帖、郷土誌・民俗誌、そして地元郷土史家との交友をめぐる書簡からこの時期に形成された郷土研究組織の性格を考察し、そこで構築された郷土像を検討することにある。それはまた、「郷土」というひとつのまとまりを持った環境が、それを研究する組織ないし研究者と連関する時、どのような意味を持ち、そこに形成される人的構成の特色となりえるのか、という課題を照射することにもなろう。

思想史上の橋浦泰雄

一九二〇年代の「アナ・ボル論争」が実質的に「ボル派」の勝利に終わって以降、多くのアナーキストたちは多くがボルシェビズムに吸収されるか、あるいは石川三四郎、近藤憲二らのように少数の同志たちによって孤立して思想信条を守ることで戦時下を生きることとなる。「アナ・ボル論争」がこうした結果に到った説明として、アナーキストがマルクス

主義者に比して強固な組織を作ることへの執着がなかった点が挙げられるが、アナーキズムを特徴付ける政治的な拘束への拒否感が、そのまま組織運営にも投影されたといえる。

橋浦泰雄[5]は、柳田国男に師事した運動家の中でもひときわ目立つ活動歴を持つ人物として知られる一方、練達の採集家・組織者として地方を廻り、柳田民俗学を支えた人物として知られる。一九五〇年には柳田国男、折口信夫とともに「民間伝承の会」が改称した「日本民俗学会」の名誉会員の称号を授与されている。この理由については後年橋浦自身が学界に対して自分がなしえたことは学術的な方面ではなく、組織の方にあったとしていることから見て[6]、昭和戦前期における日本民俗学の組織作りとは、橋浦の考えた方針が基調となったとみてよい。

昭和初期のプロレタリア文化運動の指導者の中にあって特筆すべきことは、橋浦がクロポトキンの『相互扶助論』から受けた影響をその後も手放さなかった点である。戦後に到るまで橋浦は自身のことをマルクス主義者よりも、「コミュニスト」とすることの方が多かった点から見ても[7]、橋浦がクロポトキンの「無政府共産制」を絶えず意識していたことが窺える。『相互扶助論』の成立背景には、青年時代、地理学協会の調査でシベリアにおいて実見した動物の生息状態を子細に観察し、そこにダーウィンの自然淘汰説への反証となる事例を見出したことが挙げられる。この原体験を起点に、動物世界における相互扶助の種々の事例が説き起こされ、その現象が人間社会へと敷衍されていく。ここに展開される経験的な方法は運動家、そして民俗学者としての橋浦の行程をも特徴付けた。

橋浦の思想像をよく示す事例として大杉栄への対し方がある。橋浦自身は一九二二年一月に行われた第三回メーデーの組織方針をめぐる会合において自身を「ボル派」と規定し、アナーキストとの分岐を自覚していたが[8]、一九二三年九月初め、橋浦は震災直後に有島武郎の友人でもあった出版社・叢文閣の設立者である足助素一の安否を気遣い危険を冒して同社を訪ねたところ、同じ目的で来訪していた大杉と出会い意気投合して互いに住所を教え合い、再会を約して別れた[9]。互に依拠する思想とは別個に、災害時それぞれが虚心にとった行動からその人物を見る態度がここにある。数日後虐殺され、

九月二七日、落合火葬場にて行われた大杉栄の骨上げに橋浦が参加した理由も、この体験が基礎になっていたといえる。あるいは一九二〇年四月、プロレタリア芸術家集団・黒曜会が第一回展覧会を行った際、望月桂はアナ派の主張として芸術家の個性と自由を大切にする意味で審査は不要としたが、同会会員だった橋浦は後年、望月を回顧してアナーキストにおける無欲さ、清潔さを高く評価した[10]。ここから見るように橋浦の評価の軸は、直接に自分がその人物が持つ気質に触れることに置かれていた。

一九二〇年、大杉栄は今後の労働運動の構築のされ方を述べるにあたって、労働者は未来的な社会組織への展望を把握する必要があるとするクロポトキンの言葉を汲みつつ、これを「自身の気質と周囲の状況とに応じて」進めていく必要があると説いたが[11]、運動の指針を求める際、当人の気質を重視するこの姿勢は、思想信条としてのアナーキズムより以前に、その人物に備わっている無欲さ、誠実さの中に気質としての「アナーキズム」を読み取ろうとするものといえる。そして橋浦は運動と郷土研究の両面において、この気質を発揮した一典型と見ることができる。

なお本稿では、橋浦が民俗学を志す伏線となった北海道での紀行から実質的に運動から離脱した一九三四年をおおよその時期対象とする。この時期は橋浦がプロレタリア文化運動と両立させる形で幾つかの重要な郷土研究に携わったという意味で、まとまった時期区分として設定が可能である以外に、郷土研究、ひいては民俗学について橋浦が自分なりの組織方針を固めたのがまさにこの時期だったことによる。

① 柳田国男「郷土研究と民俗学（一）」（『柳田國男全集』第二九巻　筑摩書房　二〇〇二年）　三八三頁。初出は『肥前史談』一九三六年六月。

② 福田アジオ「柳田国男の方法と地方史研究」（『地方史研究』一九七四年一月号）　一三、一六頁。

③ 代表的なものでは池田哲夫「柳田国男と地方の民俗研究家――昭和初期の佐渡の民俗研究体制――」（『日本民俗学』二一二号　一九九七年十一月号）、同「柳田國男と地方の民俗研究家――新潟県佐渡外海府・稲場美佐久を例に――」（『高志路』三三三号　一九九九年八月号）、矢野敬一「昭和初期における柳田国男の方法論とその受容――新潟県での郷土誌・史の記述を事例として――」（『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会科学篇』五五号　二〇〇四年）、伊藤純郎「昭和七年の信州郷土研究――栗岩英治と柳田国男」（『信濃』六六四号　二〇〇五年五月号）。池田論文二編は、柳田、或いはその弟子の佐渡

来訪が地元郷土史家の刺激となり、「民間伝承の会」佐渡支部結成をふくむ郷土研究会の活況へと繋がったこと、佐渡の郷土研究内部で民俗採集を行う者とそれを収集・分析する者という体制が形成されており、その意味で柳田の研究体制は地方において縮小再生産されていたとする。これに対して矢野論文は柳田の研究体制下でともすれば「受け身」の存在と受け取られがちな郷土史家について記紀神話から自立した地方の伝説の意味づけなど、自分なりの問題意識を持っていたことを指摘し、伊藤論文は郷土史家が考古学・地理学の成果を取り入れた綜合的な郷土誌の編纂を志向し、それぞれ柳田の民俗学と接することで自分の問題把握の確かさを再認識した点を強調する。これ以外に伊藤純郎『柳田国男と信州地方史　「白足袋史学」と「わらじ史学」』（刀水書房　二〇〇四年）は、「東筑摩郡誌別篇」の編纂事業中、堀一郎・和歌森太郎ら柳田に傾倒する少壮学者主導のもとで、一九四三年・四四年を中心に行われた「氏神篇」における調査内容・実施状況に照準を合わせ、この時の戦意高揚を目的とする編纂事業が自分の生まれた土地を主体的に知ろうとする当初の研究目的から反れていたことを指摘し、そこに地元と中央の亀裂を読み取っている。また、当事者の記録に近いものとして胡桃沢友男『柳田國男と信州』（岩田書院　二〇〇四年）は、柳田民俗学の地方的発展に対して長野県東筑摩郡が果たした役割の大きさを父・胡桃沢勘内の関係資料によって考証している。

④　福田アジオ「日本の民俗学とマルクス主義」（『国立歴史民俗学博物館研究報告』第二七集　一九九〇年）。

⑤　橋浦泰雄（一八八八～一九七九）　日本画家・民俗学者・社会主義運動家。鳥取県岩美郡生まれ。生家は地主兼雑貨商。岩井高等小学校卒業。郷里で文芸誌『水脈』、『我等』発行。一九二〇年日本社会主義同盟創立大会に参加。一九二〇年代後半から種々のプロレタリア文化運動に加わる。一九三八年～四八年『民間伝承』編集長。東北帝大農科大で教えを受けた弟・季雄を介して早くから有島武郎と交友関係にあった。日本共産党（第一次）創立メンバーの橋浦時雄は実弟。

⑥　「橋浦泰雄氏に聞く」（一九七九年五月二〇日　録音テープ　鳥取民俗学会での講演録　鳥取県立図書館所蔵）。

⑦　一九九七年一二月七日　宮沢聰子氏（橋浦泰雄次女）から筆者聞き取り。

⑧　橋浦泰雄『五鹿録　民俗的自伝』（創樹社　一九八二年）二四九―二五〇頁。

⑨　橋浦泰雄「一九二一年七月一九日～二三日、二月一六日　以上日記的メモ　一九六九年一月一日～」のうち九月二二日の項（鳥取県立図書館所蔵）。

⑩　橋浦泰雄「橋浦泰雄氏に聞く」（『美術運動』一九七四年七月号）五四―五五頁。

⑪　大杉栄「社会的理想論」（一九二〇年六月）『大杉栄全集』第六巻　現代思潮社　一九六四年　四七頁。

二　初期調査

「尻屋村」

大正末、橋浦によって行われた調査の特徴は、「原始共産制の遺制」発掘という明確な主題が設定されていたことは、民俗学史の上ですでに定まった見方となっている。[1] ただし、いまだ系統的な民俗採集の技術的な訓練を経ていないこと、さらにこの問題設定を過剰に意識したことから、その調査は畢竟、共同分配・共同労働に凝集されることとなった。その典型が一九二五年五月に行われた青森県下北半島の尻屋村調査である。

一九二三年九月から橋浦は札幌に居住していた兄の家業を手伝うため、頻繁に北海道へ渡り、余暇を見つけては画題を探して道内を旅行していた。さらに建築家・田上義也をはじめとする札幌の芸術家グループと交流し、[2] 一九二五年には札幌と函館で個展を行った。その線上で橋浦は岩内出身の画家・木田金次郎が漁師として立ち寄った際実見した尻屋村の生活様式を聞き、自身も実地に検分することを考え、尻屋村を訪れることとなる。この記録は「尻屋村」と題して『同愛』一九二六年一月から三月号にかけて掲載されたが、叙情豊かに綴られたこの紀行文は、的確な取材記録の中に自身が目指す理想的な生活事象に出会った感動が垣間見える点で、当時の橋浦の内面を率直に吐露したものといえる。

まず、橋浦は同村における年齢階層に応じた労働形態と均等所得、村有の種牡牛馬が村民の求めに応じて無料で使用できることなど、細かな「共産制」の事例を紹介し、次いでそれを可能にした要因として地理的な問題を掲げる。すなわち、近隣の漁村が漁労期に入ると北海道へ出稼ぎに渡ることが多いのに対し、潮流の関係上豊富な漁獲量を有する尻屋村はその必要が生まれなかったことから、資本主義化の波に晒されることなく、互助的な不文律が生き残ったとした。また、地元小学校校長の話を引きつつ、生活格差のないことは村民の気質を穏やかなものとし、争いごとの起こることがない点を強調した。さらにその基底には男女の別なく十代初めから配分権を持つ不文律があり、それが村民に責任感を根付かせ、

自治意識を高めたとした。そして自足できる分を以て事足れりとする尻屋村の「共産制」は、「期せずして此處の海岸と山林とを必然的に豊満ならしめた」[3]と、同村の慣習を周囲の自然環境との連関から説き起こした。

これら対象への橋浦の深い思い入れは、逆に自身の想定にそぐわない言動に接した時、強い拒否反応となる場合もある。実際、当時の一部雑誌・新聞には僻陬の村落を訪ね、そこに残存する慣習の中に「共産制」の色彩の濃いものを紹介する記事が散見されており、早いものでは『種蒔く人』一九二三年五月号から始まった特集「日本に實在せる共産制」が第一回として尻屋村を取り上げていた。橋浦が村役場出張所書記から取材を行った際、同書記はこれらの記事が与える影響への危惧から繰り返し橋浦に、村の慣習はあくまで旧式のものがそのまま残っているだけであり、「大杉さんなどの過激な共産主義」とは成り立ちが全然異なっていると説明したのに対し、橋浦は強い不満を表明している。[4]

「村制調書」

六月に尻屋から東京へ戻った橋浦は、有島と共通の友人で叢文閣の社主・足助素一に尻屋村で見聞したことを伝え、さらに足助の紹介で七月上旬、堺利彦を訪ねた。堺は当該の主題をより深めるためには、柳田国男を訪問することがいいと告げた。この言に従い橋浦は九月五日、啓明会主催の講演「南島研究の現状」の控室に柳田を訪れ、自身の抱負を語った。その時、柳田が教示したのは、細かな民俗事象は各個が有機的に繋がり合っており、おもむろに調査地で「原始共産制の遺制」を尋ねても、当事者の当惑を招くだけであるため、自身の課題は課題として手許に置きながら、生活全般にわたる総論的な立場から調査を行うことが望ましいというものだった。[5]この方針に沿いつつ、橋浦は九月一〇日から約三ヶ月間にわたって旧慣が残存する場所として柳田が示した飛騨、美濃、三陸沿岸等を廻って民俗採集につとめる。

この時の記録は、「理想郷を訪ねて」と「村制調書」の二種類が残されている。前者が有島武郎の個人雑誌に淵源を持つ『泉』に一九二五年一〇月から翌年三月にかけて連載されたのに対し、後者は橋浦が旅行に携行した採集手帖であり、

あくまで橋浦個人が自身に資するために書き付けた記録である。「理想郷を訪ねて」は、その題名が示す通りそこに描き出された目的に向けて誠実に対象地を歴訪する姿が足助ら『泉』同人の共感を得たが、「理想郷」の噂を聞き、訪れてみると期待を裏切るものだった叙述が散見され、依然として「尻屋村」に見られた感情的な部分を残したものである。

これに比して「村制調書」は旅の始めの部分は統計表や既存の郷土誌からの参照があるものの、主観を交えず村の沿革に始まり、冠婚葬祭、生業、産物、家族制度と、細かく項目を細分化させて村落の生活全般を眼下におさめようとしたものであり、柳田の助言を念頭にまとめた記録でもある。目を引くのは、「尻屋村」において駆使された生活と周囲の自然を複合的に捉える記述がより正確さを増している点である。例えば、「岐阜県飛騨国益田郡高根村」での調査事例では、もともと水田僅少の地で主要産物である蕨類をもって米購入に充てていた高根村の山野が、「昔日は実に豊満なる密林なりし由なるも、牛馬の飼料ヲ得る為めと、蕨根を得んが為めに乱伐して火を放ち、爾後年々火を放つ為め樹木成育せず」[6]という状態に陥ったことが紹介されており、自身の想定に叶った「理想郷」の抽出ではなく、自身が見聞きした民俗事象から眼前の問題を捉えるという新しい視点が打ち出される。あるいは「富山県東礪波郡利賀村」の「不文規約」の項では、長男以外は分家の風習が強く、分家した者は共同山林地で自活の道を立てることが多かったところ、その山林が保安林に編入されたことに伴い域内の採集を一切禁止されたことから、他県へ出稼ぎする事例が増えたことが報告される。[7]

前者は特産物への過度の依存から生まれた環境破壊、後者は県当局による自治機構の解体が俎上に乗せられているわけだが、これらの記述はいずれも細かな採集項目を念頭に集められた豊富な事例を基礎とした上で、改めて自身の関心に沿った問題に向けて再構成がなされており、『相互扶助論』を起点とする橋浦の初発の問題意識が柳田の示唆によって精度を高めていることが分かる。ただし付言すれば、いずれの調査地も数日間の滞在だったことは、聞き取りを行った人物とその後の関係を希薄なものとした。あくまで試験的な採集紀行だったことにもよるが、この在地の人物との関係性が一変するのが、翌年に行われた五島調査である。

① 竹田民郎「柳田民俗学の軌跡」（『日本史研究』第六三号　一九六二年一一月）ほか。

② 小谷博貞『木田金次郎の交流圏――橋浦泰雄と田上義也のこと（未完）』（私家版　二〇〇二年　木田金次郎美術館所蔵）四九頁。

③ 橋浦泰雄「尻屋村（三）」（『同愛』一九二六年三月号）一八頁。

④ 橋浦泰雄「尻屋村（二）」（『同愛』一九二六年二月号）二六頁。

⑤ 「柳田国男との出会い」（『季刊　柳田國男研究』第二号　一九七三年）一〇八頁。

⑥ 橋浦泰雄「村制調書　大正十四年九月中部地方旅行日記」（手書き　鳥取県立図書館所蔵）頁数記載なし。

⑦ 同前。

三　五島調査

調査の背景

尻屋村の調査が橋浦にとって民俗学を学ぶ端緒となったとすれば、その土地に生きる人物との交誼が続くという点において、一九二六年、一九二八年に実施された五島列島への調査は、まさに郷土研究の意味を考える機会となった。この成果はやがて橋浦によって『五島民俗図誌』（一誠社　一九三四年）として公刊されるが、それ以上に重要なことは、五島調査が在地の郷土史家と他所からやってきた民俗学者による共同作業という形で進められた点である。

橋浦が五島を訪れた切っ掛けは、柳田によって五島の民俗誌作成を薦められたことによる。[①] この時、地元の側から橋浦を受け入れ、終始調査上の便宜をはかったのが、『五島民俗図誌』の共著者であり、当時、五島合同新聞に勤務していた郷土史家・久保清だった。後に久保はこの時の調査について「島に住み慣れた者では、少しも感じないものの内に、多くの珠玉的發見を旅人は掴むことがある。前後二回に亘る共著者橋浦の五島踏査は、この珠玉的發見をその旅嚢に溢るゝほど蒐集した。私自身も橋浦によつて、この島のもつ特異な習俗、言語、傳説などをヨリ有難いものとして取扱ふ気持を馴致せしめられた」[②]と回顧したが、当事者として在地の習俗を熟知した郷土史家と、他地域との比較による視点から調査地の習俗の重要性を指摘する民俗学者が連携しながらこの調査は行われた。

橋浦個人の閲歴に即すると、一九二五年一二月に創立された日本プロレタリア文芸聯盟の美術部長に就任し、次いで翌年一一月に、同聯盟が日本プロレタリア芸術聯盟（プロ芸）に改称するに際して、同聯盟中央委員長となった。こうした事情を受けて、橋浦の五島滞在中はいずれも時折、当局による尾行がつくことがあったが[3]。加えて橋浦の五島滞在が通常の民俗学者と異なっていたのは、この地で調査と並行して画業に従事した点である。画才を民俗研究に発揮した例は早川孝太郎など、決して珍しいことではない。しかし橋浦の場合、五島で福江町（現在長崎県五島市）止宿先をそのままアトリエとし、調査のかたわら下五島あるいは隣接するそれに島々で自身が廻って得たスケッチから絵を制作したほか、五島在住の知己の求めに応じて描き、その代金を調査資金にあて、余裕のある場合は東京の留守宅に送金した。調査地を景観として捉え、それを画題とすることによって自ら糧を得、その作品を現地の知己が買うという互換性は、一方的な情報提供に偏重した地域調査とはおのずから異なる、循環構造を橋浦の調査にもたらした。

調査中の拠点となった福江町は橋浦の来島前後、一九二五年七月にはそれまでの郡役所が廃止され五島支庁が設置されたほか、二九年三月には福江町会議規則の制定、三一年には町内を二九区に分け、区長及びその代理人が設置されるなど、次第に中央からの地域再編が進められつつある途上にあった（福江市史編集委員会『福江市史』上巻　一九九五年　九七七頁）。

五島調査が行われたのは、運動史の上でちょうど黒色青年連盟におけるサンディカリズムをめぐる内部対立、一九二八年三月のサンディカリズム系労働組合による全国労働組合自由連合会脱会に代表されるように、アナーキストの運動が分裂し、求心力を失っていった時期に符合している。この時橋浦は先述した通り、自らを〝ボル派〟と位置付けていたものの、「原始共産制の遺制」発掘は依然として橋浦に重要な課題事項として意識されていた模様で、折に触れてその眼は関連事象を追っている。

五島列島（福江島・久賀島）略図

「五島巡遊雑感」

五島調査において橋浦は相当数の採集手帖を残している。そのうちのほとんどは、一九二八年のものであり、一九二六年の調査については先述した「村制調書」の一部としてのみ記されており、予定している次回の本格的な調査に対する布石と位置付けられる。二六年の滞在期間は二〇日余りだが、「村制調書」に記載された福江町、富江村、崎山村字長手等の調査は、季節的な労力負担に始まり、家普請、葬儀、病気など不慮の災難にいたる村内の互助行為に力点を置きつつ、童謡・民譚等の周辺的な事象も克明に記されている。

この時の紀行は帰京してほどなく、『五島合同新聞』に「五島巡遊雑感　帰りて思ふ事ども」と題する印象記にまとめられる。久保への書簡という形式をとった連載であるが、それによれば橋浦の足跡は「村制調査」の調査地以外にも玉之浦、岐宿、さらに隣の久賀島など、二年後の滞在で細かく踏査されるほとんどの地域に足を運んでいる。そして島・浦あるいは村落ごとにその環境や風俗は大小の相違があるとことわり

ながらも、五島の中にひとつの「互助共産」が励行される「理想郷」を見出そうとしている。これらはいずれも漁労・採集における相互扶助と共同分配など、かつて尻屋村で見聞したものと同じ体験から導き出されているが、ひとつ異なっているのは、それらが具体的な人物像によって確固とした展望を与えている点である。橋浦が挙げているのは、住んでいる人々の善良さ、社会組織の健全さ、そして天然に恵まれていることであるが、これらを自分に印象付けたものとして、橋浦は三週間ほどの滞在で久保をはじめとして行く先々で「玉のやうな天然の純真な人格者に出会つたこと」を掲げている。④この確信は情緒的である半面、それが具体的な事象、経験によって裏付けられるとしているところに特色があり、素朴なクロポトキン流の相互扶助社会の影響を留めている。

とりわけ注目されるのは、橋浦が同島の相互扶助の慣習をそのままの状態で存続させることを標榜しているわけではなく、現状に合わせて適宜改変することを説いているくだりである。一例として橋浦は採集・漁労の双方にわって乱獲防止のため慣行となっている「口開き」（禁止時期の終了）・「口閉じ」（禁止時期の開始）のうち、希少となりつつある品種については、「口閉じ」をさらに厳格化して特別な保護を加えるまでに発展させる必要があると提言する。「慣習に目覚めてこそ初めて真の慣習の価値を生じ成長もするのだと思ひます」⑤とあるように、橋浦は相互扶助の不文律を前代からの伝承としてのみ励行するのではなく、現時点での眼前の問題に対し、これを自覚的に使っていく姿勢を理想としている。さらにこの視点に立って橋浦は、この時の調査でもうひとつの軸となった富江付近で出土した石器類の扱いも、その価値を理解して共同でこれを保護する組織を作り、散逸を防ぐことを提案するのである。

ここから分かるように、橋浦は自ら踏査した中で目についた現実の差し迫った事柄と関係付けながら、そこに「互助共産」の意識を組み入れることで問題の解決をはかり、合わせて「互助共産」の伝承自体をも現代の中で再活性化できるものと考えている。その意味で橋浦の主張とは、直線的に旧習保存を訴えたり、あるいはそれが衰退する前に記録として残そうとするまさに研究の領域に限定をはかる民俗学者には見られない実践性を秘めたものである。かくして五島における

最初の調査は橋浦自身の主題に呼応する多くの素材を内包した土地として好印象のうちに終了した。

助力者たち

民俗誌にかかわる基礎資料が系統的に収集されたのは、一九二八年一月二二日から約二か月間にわたって実施された第二次調査である。当初、橋浦としては早めの再訪を期していたが、先述の通り二六年秋に日本プロレタリア芸術聯盟（プロ芸）中央委員長に選出されたことに加えて資金的な事情も相俟って繰り延べを重ねていた。

大凡の目途が立った二七年秋、久保へ再訪の予定を告げたところ、ほどなく来島するならば、新正月の初旬に来て旧正月中旬まで滞在するのがよいとする返信が届いた。理由として久保は「新正月は知識階級その他の正月でこの方面の人々の訪問蒐集に好都合であり舊正月は漁夫百姓の正月で古来の風習が見聞され」ることを挙げ、「絵は御出でになる前に私が暇日に勧誘して旅費は百円位御送りし御来島の上で残餘は賣る事にしてはどうでせうか」[6]と提案した。担い手を異にする新旧ふたつの正月を通しで観察することが民俗誌作成の上で大いに資するとする地元郷土史家ならではの助言が目を引くとともに、二年前の滞在中橋浦は自身が描いた相当数の絵画を久保の許に残しており、久保の呼びかけに応じて橋浦の絵画を買う人々が福江を中心に形成されていたことが文面から判断できる。橋浦が第二次調査に踏み切ったのも、これら「顧客」ともいうべき人脈によって、五島で画業による収入が見込めると判断されたことが大きかったとみられる。

最終的にプロ芸での仕事が多端だったことから、橋浦が東京を後にしたのは年の明けた一月二〇日早朝となった[7]。福岡でプロ芸の支部に立ち寄って報告することも検討したが、見送ることとし、二二日朝福江に到着し、久保の出迎えを受け、既知となっていた旅館平野屋に入りここを調査室兼アトリエとした。到着して早々、橋浦は久保から自分が出立した二〇日、議会が解散となったことを聞かされる。三月の総選挙に向けて東京では労農党支援のため、橋浦の周辺も慌ただしくなることは当然予想されたが、「何しろ同志等は忙しい事だらう。私自身の此處での仕事には大きな打撃だがやむを得な

い」[8]として、予定通りこのまま腰を据えて五島での調査に臨むことを選んだ。ただし、久保を介して『五島合同新聞』編集部に集まってくる東京からの情勢には絶えず注意することとした。

旅装を解いて直ぐに滞在中の大まかな計画が立てられた。すでに橋浦の手許には予め作成した「年中行事」「方言」「歌謡」「婚姻」「葬式と年忌」そのほか網羅的な調査項目のリストが用意されていた。これらはほぼ、『五島民俗図誌』の構成に準じるものだったが、「い、助力者を尠くとも五六人得なくては完全は記し難い」[9]ことを痛感する。ここで「助力者」という場合、必ずしも被採集者を指すものではない。実際、橋浦は五島支庁長の了解を得て公的機関による民俗採集のルートを確保するため、小学校長会議に出席して質問表を配布して調査への理解を求めている。それとは別に目を引くのは、画業も含めた現地での橋浦の活動に触発されて調査行に同道する人物が対象に入ることもあった点である。

第二次調査による滞在中、橋浦は福江から日帰りで奥浦、鬼岳、大津など近隣の地域を廻ることは度々行っていたが、それ以外にも二月二一日から二二日にかけての久賀島行き、同二六日から二九日にかけての玉之浦行き、三月一六日から一八日にかけての岐宿行きなど、泊まりがけの旅行も試みていた。このうち単独で行われたものは玉之浦行きのみで、久賀島は福江で知り合った青年・藤原兵衛、河村包未、岐宿行きは『五島民友新聞』の田尾喜久馬の案内によるものだった。河村、藤原、田尾はいずれも福江で橋浦と知り合い、その調査行に同道した人物であり、行く先で習俗をよく知る人物を紹介するほか、自らも率先してその話を聞こうとした。橋浦の五島調査の特色は、直接調査の対象となる人物以外に、こうした自分から郷土のことを知ろうとする群像が背後に控えていたことにもある。

「アナキスチツク」な形像

第一次・第二次を問わず、橋浦の五島調査で大きな影を落としているのが、アナーキズムに対する距離の取り方である。当時のプロレタリア文化運動で主導的立場に押し出され、自身も「ボル派」を称していた橋浦であるが、五島という調査

地において出会った民俗、風景、そして人物に対して、強い階級意識的見地からこれを断じる姿勢はむしろ希薄である。これは尻屋村での調査からすでに胚胎していたともいえるが、その中でひとつ、橋浦の思想像を知る上で手掛かりとなるのが「アナキスト」ないし「アナキスチック」という言葉の使い方である。

その一例が久賀島に調査旅行中の二月二一日夜、投宿先で久賀の地元小学校教師と藤原、河村らとともに、当地の「人魂」にまつわる体験談を話し合った時のことである。ちょうど地元から山口という好事家の青年も加わり、様々な事例が報告されたが、特に山口と小学校教師によって話された切支丹の惨殺された土地で多くの「火の玉」が出るとの実見談は収穫だったと見えて、そのままの形で『五島民俗図誌』にも記載されている。橋浦自身はこの無名の青年から好印象を受けると同時に、その言葉の端々から「山口君はアナキストらしきがかなり聡明らしいのでゆつくり話したくも思ひしも先生同席なりし為め、僅かに宗教問題に触れしのみ。然し逸してはならぬ好青年　機を得るの必要あり」[10]と記した。

何をもって「アナキスト」と位置づけたのか判別はつかないが、ここでは必ずしもそのことが肯定的に捉えられているわけではなく、さらに時間的な余裕があれば、細かな話題を通じて広い知見を身に着けさせることで「アナキスト」的な部分を変えることが、むしろ当人を良い方向へ向かわせることを匂わせる記述である。しかし同時に眼前で自分が接している人柄そのものへの親和力から出発するという点で、震災直後の大杉栄に見せた態度との連続性が見出される。同じく、これと前後して二月一五日、福江島北部の奥浦湾へ調査に行った折、そこで目にした田園風景について抱いた感想は、橋浦の「アナキスチツク」なものへの対応を考える上で、重要な素材足りえる。

> 奥浦からは入江沿ひでなか〳〵に景色がよく、段々先に行く程よくなつて、教会堂を眼下に見下す附近に至つては小景ながら遠望もあつて筆紙に尽し難い明媚の風光。殊に海から直ちに急斜面になつた山腹に点々として散在する切支丹人家と段々畑との交錯した風景は折から椿、梅、橙、棕梠等及び牛などを塩梅して眞に自然と人間生活との融合しきつた風景で個人主義的に云ふならば

眞に此の世ながらの完全な理想郷を現出したものである。それ丈けにひどく魅惑に富んでゐるが大人類の動き進みはかうした一種のアナキスチツクな状態では解決し切れぬので此處にも大きな人間生活の悩みが積つてゐるのを痛感させられる。[11]

ちょうど画題となる風景を探している矢先のことだったため、景観が持つ印象がひとつの像を結ぶ瞬間の思考であるが、ここには自分の捉えた「アナキスチツク」な形象をめぐって自己内部に引き裂かれた感情があることが分かる。すなわち一方は周囲の風景と共生しながら日々の生業を営む田園の在り方を虚心に肯定する自分であり、もう一方はこの風景の中にもそこに住む一人一人の生活苦が隠されており、それらを解決するためには外側から彼らに対して労働者としての目的意識を植え付けていかなくてはならない、とする自分である。しかも橋浦はこの葛藤に折り合いをつけて、どちらかに正統性を求めることについては留保している。運動上の変動にかかわらずクロポトキンへの素朴な傾倒が続いた要因も、そこにあったといえよう。橋浦のように強い政治的課題を胸に地域調査を行う者にとって、自身を取り巻く事象に魅了され、その現状を受け入れようとする一方、その自分を振り切っていま一度社会的な見地からその事象が抱える問題の所在を確認しようとするこの種の葛藤は不可避のものといってよい。自身の主観や印象を混入させないことを原則とする柳田の指導に従って作成された採集手帖には、当然のことながら直截な採集結果のみが記されているが、奥浦で起こった同様の感慨は、調査の過程でもしばしば起こったとみられる。

採集手帖中、総論的に五島の沿革を述べた個所で、橋浦はまず「大体は自給自足的生活にて、貨幣流通頗るにぶし」「概して相互扶助の旧習盛んにして粗樸なり」と記し、特に久賀島にこの傾向が著しいとして、同地の「旅人へのもてなし厚し」と結んでいるが、[12]さらに久賀島を特化して扱った別の採集手帖でも同地で発達した相互扶助の慣習にふれ、幾つかの集落が決して豊かではないにもかかわらず、外来者に対しても惜しみなく世話をすることが慣例化しており、巡礼者が立ち寄る場合、一年以上も滞在することがあると記録している。[13]互助的な習慣がそのまま外部に対しても開かれている

こと、しかもそこに豊かさから生まれる余剰という通念が当てはまらないことなど、それまでの橋浦の思想的な足跡から考えれば、まさに理想的な民俗事象に出会ったといえるだろう。しかし共同体内での調和が保たれているとしても、より広い社会的な法則に照らし合わせて考察の対象としなくてはならない、とする奥浦で起こった「アナキスチツク」な状態への批判を傍らに置けば、この久賀島の事例もまた、橋浦にとって現状に対する共感と、同時にそこからの自身を脱却させるという葛藤を起こさせたといえる。

その一方で橋浦の判断基準は、対象となる場所や人物に自分が直接相対することが評価の前提になっている点において一貫している。さらにその評価の尺度となっているのは、その風景・村落社会の持つ堅実さ、あるいは人物の誠実さであり、対象の中にそれが認められる時、そこに強い親近感が生まれる。とりわけそれが人物に向けられる場合、その基準となる誠実さとは出世欲や権力志向を持たない点で、アナーキストの属性に通じるものでもあった。自身の創意を優先させ、およそ功名心とは無縁な画業生活を送った木田金次郎との交流が示すように、橋浦はこうした〝アナーキスト気質〟を、退潮していくアナーキズムの中にあって、同時代のプロレタリア文化運動の中枢にいながら持ち続けていた。[14]

「三・一五事件」以後

五島滞在中も橋浦は総選挙の行方については絶えず神経を使っており、数回労農党本部へ激励の電報を打つなど、運動との接点は残すこととしていた。民俗採集と画業の合間には、定期的に弟の時雄から送られてくる『無産者新聞』を読むほか、プロ芸からの報告書にも目を通し、東京から送られてくる情報には注意を向けていた。二月二〇日の投票日は、『五島合同新聞』編集部で久保とともに予想談義に花を咲かせ、大勢が判明する二三・二四日はやはり久保の所で選挙結果について意見交換を行っている。

三月一五日の一大検挙が行われたのは、橋浦がそろそろ五島の調査にも目算が立ったので、帰京を考え始めた頃だった。

前後の「五島遊記　一九二八年」には、それを窺わせる記述はない。しかし、「三・一五事件」の新聞報道が概ね四月中旬日まで抑えられていたことから見て、事件から日を置かず内々に久保、ないし『五島民友新聞』の田尾より個人的に労農党への大弾圧があったことを知らされたとみられる。橋浦が五島を離れたのは三月一八日であるが、下関付近での列車臨検などを巧みに切り抜けながら帰京した。

帰京してほどなく、橋浦は壊滅に瀕したプロレタリア文化運動の再興を期してプロ芸と、それまで対立関係にあった前衛芸術家同盟（前芸）との合同が実現の途についており、ついてはその中央委員長に就任してほしいと、準備委員会書記長をつとめていた太田慶太郎から打診を受ける。系統的なマルクス主義への知識が不足していることを理由に再三固辞したが、仲間の協力が得られることを確認し、四月二八日の合同総会で議長を務め、次いでその席上で暫定的に「全日本無産者芸術聯盟」（ナップ）中央委員長に選出、就任することとなる。[15] その間、五島の知己とは音信が途絶したままの状態だったが、九月に入って久保清から安否を気遣う書簡が送られてきた。

> 久しく御無沙汰致しました。あれから半年にもなりませうか。ほんとうに御無沙汰致して済みませんでした。
> 共産党事件からアナタの事もその後福江署で救回聞きに来ました。川村包末や藤原兵衛君などの消息も取調べたらしいです。でもアナタに何の関係も無い事は私が保証する事ですから。福江署では勿論問題にもしませんでした。たゞ困つたのは御委託の画がその後貰れずにある事です。なんとかしてと思ひつゝも捗々しく行きません。今に抱いて理解あり郷土の自立を賞味する人々を待つてゐる次第です
> でも豫約の分は近日中に解決して御送りすべき代金はお送り致しましせう。〔中略〕資料収集の事はアナタが労農党の関係者だと判つたので支廳長や視学にコチラから遠慮したがよからうと某教育家の話もあつてその後の追及を見合せましたが篤志家の寄稿も別にありませんでした。つまらぬ風評に気を兼ねて貴重な出版物の完成に貢献しないなどは今更ながら頼みにならない人間たちと感じました。

私はたとへアナタが共産党員であらうが労農党員であらうがそんな事は微塵も気に掛けてないのですからこの点は御安心下さい。又思想に国境無く、思想の自由を許された現代人として道途の浮薄な批評や揣摩などに脅へて十年の知己にも勝るアナタとの交誼に寸隙を生じてなるものでせうか。世評が無理解で冷酷で圧迫的であればあるほど反抗的に結んで行くべきが現代人の情誼です。苦闘に戦ふ我等の信念なんです。〔中略〕

又、この秋にか冬にかいらつしやいませんか。私は先日知事の初巡視に同行して私自身が見聞の狭いのを恥ぢました。それほど五島の各方面に風景に人事に村落に変化があつてゐました。いくたのアナタにお目に掛くべきものを発見したのでした。[16]〔以下略〕

橋浦が福江を去って以降、「三・一五事件」の余波は着実に五島にも広がっており、調査の間、橋浦と頻繁に接触のあった人物も当局によって取り調べを受けており、久保もその例外ではなかった。そしてその影響は、橋浦をプロレタリア芸術家として関係者に認識させることとなり、託した絵画に買い手がつかないまま置かれるという事態を生んだ。それを覆って余りあるのは、久保が「三・一五事件」によって聊かも動じることなく、二年間の交流から得た橋浦の人間像を信頼していることであろう。久保が地元紙に携わり、誇大かつ扇動的な報道に対して冷静な判断を下す立場にいたことを考慮するべきであるが、それ以上に労農党、共産党といった同時代における特定の思想潮流を代表する組織への見解をその人物と一体に捉えることなく、あくまで自身の経験によって得られた人物像を優先させ、そちらを評価の軸にしていることは注目に値する。それは同時に人物が持つ誠実さを判断の基準とする橋浦の姿勢とも照応しあうものでもあった。

郷土研究の雛型

一九二九年一月、橋浦は日本プロレタリア美術家同盟（ＡＲのちＰＰ）の結成に立ち会い、中央委員となる。一九三一

年一〇月、ナップがプロレタリア文化聯盟（コップ）に再編され、ナップ時代の協議体的な性格に代わって共産党の強い指導力に基づいた組織形態が運動上の基軸となるが、この間に橋浦は日本プロレタリア美術家同盟に戻り、中央執行委員長をつとめるほか、一時『プロレタリア美術』の編集にも携わった。三〇年代に入って久保との音信はしばらく途絶えるが、一九三四年『五島民俗誌』が一誠社より刊行されたことを機会に、両者の往還が復活する。

御手紙誠におなつ可しく拝見致しました。土佐の方へ御出でになり御郷里へもお立寄り遊ばさるゝと聞くとぜが非でも五島へ歩度を延ばして頂きたいやうに衝動をそゝられます、でも今度は御日程が限られてゐらるゝ由で残念でなりません、然し蕫正月の候再び土佐への旅行を決行さるゝ機會には是非とも五島へ御立寄りをお願ひ致します、画の方も責任をもつて御世話致しますし又以前御出でになつた頃とは大変に変つた諸所の実況なども親しく御目に掛け圖誌再版の機會の増補訂正の資料に供したいと存じます、語るべき事はとても二日や三日では足りないこと御同様です、又白髪を語るお互の外に一人や二人の語り合ふ人も御紹介致したいのです、

私は圖誌が出版されたので一入五島と貴兄とが離るべからざる御関係にあるので五島を第三の故郷とでも思はれて今後はもつと五島に接近して頂きたいと切望致します、その接近の機会を私はあらゆる場合にも喜んで執りたいのであります、〔中略〕

出版はついて知識のない人々は十冊も二十冊も寄贈可出来ると思つて事もなげに相談されるのには困りました、事情を話て断つてゐますがそんな男に限って有料で購入してくれるでもないやうです、藤原兵衛君は一冊御指定により寄贈しましたら二冊別に贈與してくれとの注文で仝君へは寄贈致しました、[17]〔以下略〕

一九三四年三月には日本プロレタリア美術家同盟の解体声明が出されており、実質的に橋浦はプロレタリア文化運動から一線を引いていた。一九二三年以降、「五島遊記　一九二八年」によって短期間付けられたことを除いては途絶えてい

た日記がこの年再開されるのも、検挙の可能性が薄くなったことを示唆している。一方、久保の書簡から判明するのは、かつて橋浦との類縁から取り調べを受けた藤原兵衛が自身も参画した調査がひとつの成果として刊行されたことを素直に受け止め、これを喜んでいる様子である。翻って久保と橋浦の交流が橋浦の政治活動歴における変動とは無関係に続いたことを考えれば、五島において橋浦の調査に加わった人的な繋がりは、もともと同時代の政治運動とは別個に成立したものだったといえよう。

五島調査が行われたのは、橋浦にとってクロポトキンの影響を残しつつ、「相互扶助」の民俗事例を求める率直な探究心と、その事例が有する「アナキスチツク」な現状に対してはこれを階級的な視点から分析してそこに変革の必要を認めるというふたつの視点が互いにせめぎ合っている時期だった。こうした葛藤を内包しながら、それによって調査が破綻することなく、一個の民俗誌として纏められるまでに到ったのは、ほかならぬ現地の知己との間に良好な関係があったことに起因する。その関係は先の久保の書簡が示す通り、余所者としての調査者が現地の郷土史家からその土地を「第三の故郷とでも思はれて」[15]ほしいと言われるまでになっていた。「民間伝承論」、「郷土資料の蒐集と分類」で柳田が想定する「郷土人」の感覚をもってしか捉えられない「心意伝承」とは、地元の郷土史家と外側の調査者との関係がこの域にまで達した時、採集上立ちはだかる壁を破ることすら可能な状態を生み得たのである。

終了した時点で橋浦の五島調査を見る場合、郷土研究を行うに際して「尻屋村」や「村制調査」にはなかった新しい要素、すなわち地元の郷土史家の像が加わっていることが分かる。さらにその郷土史家とは同時代の政治動向に左右されずに、あくまで郷土研究を通じた信頼関係を自分との間に結ぶことのできる人物であるか否かを重要な判断基準としている。これらの郷土像・郷土研究像は橋浦が実際に五島の地で経験した蓄積の上に成り立っており、理論化される場合でも決して硬い原則論に結びつかないところに特色がある。この郷土研究における手応えは橋浦がこれに続いて行った東筑摩郡での郡誌作成の中でより鮮明なものとなる。

① この調査に先立っての具体的な根回しについては柳田国男に多くを負っていることはほぼ確定しているが、それ以外に、特に一九二八年時の調査に資金的な援助を与えた人物として、橋浦は白井喬二の名前を挙げている（「五島遊記　一九二八年」〔手書きノート　鳥取県立図書館所蔵〕　頁数なし）。白井と橋浦は、一九一〇年代初頭、地元鳥取で同人誌を通じて野村愛正らとともに文学サークル回覧社（のち白日社と改称）を結成して文壇で活動した後、相次いで上京し、ともに創作活動に投じた経歴があり、その後も頻繁に交流を続けていた。

② 久保清・橋浦泰雄共著『五島民俗図誌』（一誠社　一九三四年）「自序」　三頁。同書に柳田が寄せた「序文」には、同書が対象とする地域が下五島に偏していることが指摘されているが、本稿において橋浦の調査ノートに関して取り上げられる叙述も、「五島」と表記されている場合でも、特別に「上五島」とことわっている場合を除いて下五島およびその周辺地域に限定される。

③ 橋浦泰雄「五島遊記　一九二八年」（手書ノート　鳥取県立図書館所蔵）　頁数記載なし。

④ 橋浦泰雄「五島巡遊雑感　帰りて思ふ事ども（一）」（『五島合同新聞』一九二六年八月二〇日付　橋浦赤志氏所蔵）。

⑤ 橋浦泰雄「五島巡遊雑感　帰りて思ふ事ども（二）」（『五島合同新聞』一九二六年八月二七日付　橋浦赤志氏所蔵）。

⑥ 一九二七年一一月一〇日付　久保清から橋浦泰雄宛書簡（鳥取県立図書館所蔵）。

⑦ この日から日記として「五島遊記　一九二八年」（鳥取県立図書館所蔵）が付けられはじめる。日付はまず新暦で記した上で、旧暦を併記する形をとっている。

⑧ 橋浦泰雄「五島遊記　一九二八年」　前掲。

⑨ 同前。

⑩ 同前。

⑪ 同前。

⑫ 橋浦泰雄「採集手帖」（手書ノート　鳥取県立図書館所蔵）　タイトル・頁数等記載なし。

⑬ 同前。

⑭ こうした判断基準は、五島で出会った人々に限らず、運動上かつて交流のあったアナーキストに対しても同様である。二月二三日にはかつて橋浦も参加した大杉栄夫妻の葬儀をアナーキズム系運動団体の合同葬として企画・運営し、震災後の戒厳司令官・福田雅太郎大将の暗殺を図って無期懲役の判決を受けた和田久太郎が収監中の秋田刑務所で自殺した報に接した橋浦は、「生きているうちに救い出せなかったのは残念だ」（橋浦泰雄「五島遊記　一九二八年」　頁数なし　前掲）と感慨を綴っている。

⑮ 橋浦泰雄「ナップ初期のころ」（『文化評論』一九六八年五月号）一五〇頁―一五一頁。

⑯ 一九二八年九月一〇日付　久保清から橋浦泰雄宛書簡（鳥取県立図書館所蔵）。〔　〕内引用者。同書簡の余白には、橋浦の筆跡で「河村蘐原行方不明」とある。

⑰ 一九三四年一二月一日付　久保清から橋浦泰雄宛書簡（鳥取県立図書館所蔵）。〔　〕内引用者。書簡中「土佐」とあるのは、この年から柳田の指導下で「全国山村生活調査」が開始され、「木曜会」を中心とする弟子たちが全国の僻村へ派遣され民俗調査に当たっており、橋浦は高知県檮原村を担当したことを指す。

⑱ 「第三の故郷」に対して、第一・第二の故郷に当たるのは、鳥取、そして一九二八年の時点で繰り返し画題を求めて歩いた北海道のことだったと見られる。

四　東筑摩郡調査

「話をきく會」

柳田国男と東筑摩郡との関係は一九一六年七月、諏訪での講演の後、『郷土研究』の発行元である郷土研究社の岡村千秋を介して松本に立ち寄り、胡桃沢勘内と交歓した時点にまで遡ることが判明している。翌一九一七年一〇月、『東筑摩郡誌』の編纂に加わった際、胡桃沢が柳田の「郷土の将来と子孫のために役立つ」という観点から郷土誌を編纂する必要を東筑摩郡教育会に説き、柳田の指導下で『東筑摩郡誌別篇』の編纂が計画されたことにより[1]、同地との縁はさらに深まった。この過程で東筑摩郡は柳田にとって内発的な志による郷土誌実現が見込まれる理想的な地域として受け止められるようになる。

一九二九年四月初め、橋浦は信州松本を経由して浅間温泉に入った。来訪の理由は松本出身で柳田と深いかかわりのあった出版社・岡書院の岡茂雄から同地に滞在して絵を書きためた上で、松本で画会を開いてはどうか、と提案を受けたことにあった。ちょうど前年、橋浦の窮乏を見かねた柳田、白井喬二、足助素一らが音頭を取って、橋浦の絵を買う小規模な頒布会を行い、岡をはじめ、渋沢敬三、山崎今朝弥ら旧知の友人たちが賛同して購入して成功を収めていたことから、これと同種の企画を東筑摩郡で行っても同様の成果が期待できるという見込みも介在していた。投宿した翌日、橋浦は既に柳田から紹介状が廻っていた郷土史家で長年松本銀行に勤務し、当時、丸松商事株式会社常務取締役を務めていた胡桃沢勘内を訪ね、さらに胡桃沢から郷土史家仲間で来るべき画会の発起人予定者である矢ケ崎栄次郎、池上喜作・隆祐兄弟らを紹介された[2]。

五月四・五日と、「橋浦泰雄畫会」が松本公会堂で開催された。地元から運営の中心として設営の中心となった胡桃沢は松本から橋浦の逗留先の浅間温泉に書簡を送り、コーディネーターとしての役割を意識しつつ、細かに運営側の希望を

伝えた。展示されたのは多くが信州の風景・民俗を題材としたものだったが、会期が迫った四月二一日付の書簡では、「松本民謡絵巻」を描き上げて陳列することが出来れば、「土地の興味を引く上から云つても効果があらうかと存じます」[3]と書き送っている。外来の民俗学者によって「絵巻」に描き出された郷土像を地元の側が鑑賞するという試みが目を引くが、そもそもこれは東筑摩郡で発達した民俗学の特色でもあった。胡桃沢と池上喜作が作成した画会の趣意書は、天明四（一七八四）年にこの地を訪れた漂泊の画家・菅江眞澄になぞらえて橋浦を紹介しており[4]、偶々この地に立ち寄った才人に当地の民俗を描いてもらうという「伝統」の上に橋浦は位置づけられた。画会終了後、胡桃沢は眞澄の絵と橋浦の絵を比較しながら、「尤も新なるものに感興をもとめて淋しみつゝ歩みゆきし百五十年前の旅人と古をなつかしがりつゝ歩み来りし今の世の旅人とのちがひと存じ申候」[5]と東京の橋浦に書き送った。ここから見ても、外の世界からやってきた人物の捉えた郷土像を滞在中そのパトロンとなった人々が見ることで自身の郷土像を再認識する気風の上にこの画会が成立していたことが分かる。橋浦の絵を買うという地元の人脈は五島において既に成立していたが、東筑摩郡においては胡桃沢を中心に十数年にわたって形成されてきた郷土史家の人脈があり、橋浦の絵画頒布会はそれに乗る形でさらに大規模かつ組織的に展開されたのだった。

橋浦の画会は、会を設計した側にも郷土を異にする遠来の客との交歓によって、自身の郷土研究が活性化する道筋を確認するという点で、思わぬ効果をもたらした。この機運は橋浦が東筑摩を後にした同年八月二四日、「話をきく會」の成立をもって具体化するが、その設立に到った経緯を説明するにあたって同会は、菅江眞澄がかつて『眞澄遊覧記』に結実する郷土記録の第一巻を落筆したのが、ほかならぬこの松本平であったことを記した上で、「橋浦君の五嶋（ママ）や北海道の旅の話を興味深くき、ながら、我々の話は又新來の旅人の耳を聳てしめた。これが實は我々の『話を聽（ママ）く會』の芽生へでもあつたのである」[6]と結んだ。これ以降、「話をきく會」は東筑摩、松本、上伊那の郷土史家有志によって、互いに気心の知れた郷土史家たちがこれら外来の民俗学者たちと談論風発する場として橋浦、柳田、伊波普猷、早川孝太郎、折口信

夫らが信州へ立ち寄る際、折にふれて開催された。

「画会」に集う郷土史家

胡桃沢らの準備が周到だったことから、橋浦の「画会」は成功を収めた。また、これが機縁のひとつとなり、『東筑摩郡誌別篇』のうち特に「道神誌」は筆写と写真撮影の技量を生かして橋浦が担当することとなる。さらに信州での滞在中、東京をはじめとして、「四・一六事件」による共産党員への一大検挙が行われたが、橋浦は五島の時と同様、結果的に難を逃れた形となった。七月三〇日付で胡桃沢が橋浦に宛てた書簡は、会期終了後も購入希望者が現れ、その代金を送付することを伝えている。同書簡で注目すべきことは、胡桃沢が松本へ派遣されてきた大蔵省官吏と面談した感想を述べたくだりである。

……今日は銀行へ大蔵省の官吏が来て此暑いにずい分面倒なことを云つて居ります　地方の事情に無理解な検査といふものが又小さな商人たちの手許資金を一層窮屈にする結果になると思ふと自分ながらこんな商賈に在ることを暗いこゝろで考へたくなります　此位小さな銀行をつぶしてブルジョア銀行ばかりにしようといふのが政府の方針なのです　近年のモラトリアムといふものは実はどんな銀行のどんなことに原因して起つたかといふことは疾くに忘れてこんな小さな田舎の銀行があるから経済界は前途不安だといふのですから世は逆まではありませぬか　産業組合法の信用組合の預り金や貸金が眞に其法の精神の通り組合員といふ小さな多数民人の相互扶助の機関でない限りは　これから後田舎の経済界といふものは不安であり且田舎の金といふものは大銀行といふものに吸収されつゝ或階級ばかりの収益の為にのみ流通することでせう　内閣がかはつても待ちに待つた世の中の明るさは此先見込がありません⑦〔以下略〕

東筑摩郡における橋浦の調査は、道祖神に特化して行われたこともあって、「相互扶助」を指標に生活事象全般に目を配りながら民俗誌を書こうとした五島とは自ずから目的を異にしていた。その一方でこの文面から類推されるように、こ

の地においても橋浦は胡桃沢をはじめとする郷土史家たちとの会話において求めに応じて自身の社会観を話題にし、そのことが金融恐慌下でのモラトリアムの余波を受け、浜口内閣の下でも依然として呻吟する地方銀行の実情を当事者として体験していた胡桃沢との間に親和性を生んだといえる。しかも両者の親和性は在地の郷土史家が外からやってきた民俗学者を歓待する、この地の「伝統」の上に成り立っており、決して同時代の局所的な政治的要因によるものではない。

その傍証となるのが、胡桃沢をふくめ、「話をきく會」の主要メンバーたちがその後も、絶えず橋浦の身を案じ続けている点である。その後も橋浦は日本プロレタリア美術家同盟に関わる運動に従事していたが、絶えず検挙の危険に晒されていた。一九三二年六月から全国的に起こった「米よこせ運動」を受けて、一九三二年六月から七月にかけて橋浦は「政府払い下げ米獲得闘争」の応援のため北海道に渡り、現地から東京の本部の松山文雄へ報告を行っていたが、拠点を置いていた札幌へ池上隆祐が「新聞や東京の街の何か物々しい此の二三日の警戒で何となく物情騒然たる（一寸大袈裟ですが）気分が致します　成る可く長く北海道の方にゐられてこんなやかましい東京へは出来る丈け遅れて帰られることを切望してゐます　近来健康もあまり勝れないやうに思はれる貴方が検挙なぞされると死んでしまふかも知れません体を第一にされて出来る丈け長く生きて地味ない、仕事を沢山されることを希望してゐます[8]」と、安否を気遣う手紙を寄せている。東京では六月一九日、日本プロレタリア文化聯盟が築地小劇場にて中央拡大協議会開催を予定していたが、警視庁特高課は先手を打って一八日早朝、幹部の一斉検挙を行ったほか、翌一九日予定通り行われた協議会でも一九八名に及ぶ参加者が検挙された。特に一八日の検挙者の中には日本プロレタリア美術同盟では岡本唐貴、作家同盟では秋田雨雀など、橋浦の運動仲間が含まれており[9]、迂闊に帰京すれば橋浦の身にも危険が及ぶことが想定された。

東筑摩の郷土史家達に共通しているのは、運動で消耗する橋浦にとって、画会を開催するのは、官憲による締め付けが予想される東京よりも地方、それも既に十分な人脈が開拓されている東筑摩・松本の地が適していると考えた点である。一九三三年九月七日に矢ケ崎栄次郎が橋浦に宛てた手紙は、その典型ともいうべきものである。

……先般柳田先生の入信の節画會の話しがありまして九月下旬か十月初旬頃成城で君の画會を開き度いからこちらにある好い画も出して見てハどうかと申して居りました此度も池上君に會ひました時に矢張画會の話しがありましたが、これが果して成功するかどうかといふことは少しく疑者しいやうに小生にハ考へられます、殊にそれが東京ではです、いろ〳〵今日迄の思想関係もありますし、それが本當に柳田先生が直接の責任を持つてやつて呉れるならそれハ結構ですが、さうでなくて其為めに累を他に及ぼすことがあつてはそも存じますし、第一東京でさうした會に於て責行のあるや否も頗る考へものだと思ひます〔中略〕、東京の方のはよく御熟考下さつて場合によつては思ひ止まる方がよろしくはないかと存じます　十日過ぎになりましたら池上君も帰京することゝ思ひますから一應同君にも御相談下された方がよいと存じます〔以下略〕[10]

今後も可能な限り橋浦の「画会」を続け、そのことによって自分達の郷土研究が活気づくというのが彼らの心算だったといえよう。実際に最初の「画会」の成功を受けて、その後も橋浦の「画会」は一九三〇年九月、三一年七月と松本で開催された。一九三〇年の方は発起人を立てなかった以外は前回の「画会」を踏襲し、それ以外に「即時似顔絵揮毫」として橋浦が希望者の似顔絵を「大判色紙一圓」で描く催し物も行われた[11]。これに対して一九三一年の方は「橋浦泰雄君畫番茶器頒布会」と銘打って行われた。道祖神に関わる資料採集の余暇、橋浦が立ち寄った松本にほど近い城山の麓にある製陶場で新たに試作された白樺焼に絵付けを行ったところ、「世上の有名窯場の陶器の持たない野趣と、日常生活への親しみと氣品とを備へ、この白樺焼に一段の味を出すものと」[12]なったことを機縁として、橋浦の絵付けによる番茶器頒布会を開催するに到ったと、ここでも外側からやってきた画家と地元の窯業が思わぬ効果を上げたことが強調された。発起人の冒頭には胡桃沢、矢ケ崎、池上喜作が名を連ねているものの、これまで発起人の常連だった柳田、折口ら東京の民俗学者の名前は消えており、あくまで東筑摩の郷土史家が中心となったほか、運営面では白樺焼の製作元・赤穂製陶所と松本市内の書店・大成堂書店が労をとった。

一方、菅江眞澄と橋浦を結びつける試みは、一九三〇年四月にこれも大成堂から刊行された『眞澄遊覧記信濃の部峡』

の中で橋浦が肉筆の装画を行うことで依然として続けられており、柳田が寄せた序文と相俟って限定三百部の予定を大幅に上回り、六五〇名もの希望者を集めることに成功した[13]。

さらに一九三四年の五月六・七日に長野市長野電鉄ホールで行われた橋浦の「画会」は、東筑摩郡の人脈が広く信州の他郷にも伝播したことをうかがわせる。柳田、白井喬二、長谷川如是閑らが発起人となる一方、運営は長野市市会議員で読売新聞長野支局長を務める矢ケ崎賢次が務めた。五日夜には長野市で「話をきく会」が催され、松本・東筑摩郡からは胡桃沢、矢ケ崎栄次郎、そして大成堂の佐野豊太郎らが駆け付けた。二日間の会期を終えて、「展覧会は準備（宣傳）不足なりしも思はざる好成蹟（ママ）裡に會を閉ず。出品点数四十点位の處内約束済となりしもの十七点[14]」という成果を挙げた。次いで五月一五・一六日と松本でも「画会」が催され、「約三十点の出品中その三分の二の二十点を賣約となす」成果が得られ、橋浦自身「長野と云ひ、松本と云ひ、此の不況時に全く意想外の好成蹟（ママ）なり。しかも宣傳甚だしく遅れ準備も整はざるに此の成蹟（ママ）は全く諸兄の同情によるものなり。只々感謝に堪へず、此の上の精進を以て謝せんのみ！[15]」と記すまでに到った。

郷土に置かれる人物像

東筑摩郡における橋浦の調査時期は「相互扶助」を自らの課題としながらも、絶えず細かな民俗事象にまで眼配りが行き届く点で民俗学者としての橋浦がその力量を拡充していく時期でもある。委嘱された道祖神については、郡内のものについては網羅的に記録を取り、細かな分布表を作成した[16]。すぐれて政治的な要因から生まれた自身の主題から離れて、冷静に独立したひとつのモノグラフを記述する抑制的な観察方法が身に付いた点で、今日まで伝えられる練達のフィールドワーカーとしての相貌がここに定まったといえる。

先述した通り日記が再開された一九三四年は、橋浦にとって一月の日本プロレタリア美術家同盟の解散決議、三月の解

体声明を背景としており、運動から離脱した年と位置づけられる。その中にあって、例外的に日記に登場する運動関係の記述に消費組合活動がある。一九二六年に西郊共働社（のちに城西消費組合）の設立に橋浦時雄と加わり、全日本消費組合聯盟の中央委員となって以来、橋浦は同組合の運営に尽力してきたが、東筑摩郡で民俗採集を行うかたわら、組合へ出荷していたことが判明している。

早いものでは一九三三年九月七日の矢ケ崎栄次郎との書簡の中で季節の産物が列挙され、「若しよろしいやうならば今から手順をしておかないと間に合ひませんが其手続等をも承り度いと存じます」とあり、矢ケ崎の人脈を頼って篤農家と契約し、城西消費組合へ栗・長薯等を送っている。狭められていく活動範囲の中で、実現可能な領域を定めようとする際、その橋頭保となるべき場所のひとつを橋浦は東筑摩郡に求めたのだった。最終的に橋浦の消費組合活動は、一九三八年一月、城西消費組合の母体である関東消費組合聯盟が解体決議を行うことをもって終わるが、敗戦後矢ケ崎が死去するまで両者の交流が継続されていることから見て、矢ケ崎は橋浦を通して同時代の消費組合活動への理解を持ち続け、これを支援したといえよう。

これに限らず、東筑摩郡における橋浦の調査に関わる経費は東筑摩郡教育会からの援助もあったが、多くは頒布会その他で橋浦が自身の絵を売った収益によって賄われた[17]。これまで見てきた通り、購買者のほとんどは「画会」を介した地元の支援者たちであり、その「画会」の背景にあるのは「話をきく会」の成立に見るごとく、外からやってきた民俗学者を迎え入れることで地元の郷土研究が活性化するという発想である。これらの事実を確認する時、そこに外側からやってきた民俗学者とその土地の郷土史家との間で郷土研究を媒介とする見事な往還がなされていることが読み取れる。

この往還を可能にしたのは橋浦と彼が接した郷土史家との間にある信頼である。基礎資料収集のため、橋浦は丹念に郡内の村々を廻ったが、調査先で同宿した先導役の教師から乞われれば、マルクス主義について語ることはあったが、誘導宣伝することについては絶えず自重した[18]。他方、橋浦が交流した東筑摩郡の郷土史家に共通しているのは、橋浦がプロレ

タリア文化運動に従事していることを承知した上で、そこから独立して民俗学者としての橋浦の資質を見出した点である。道祖神の記録を委嘱し、菅江眞澄に連なる民俗画家として自分達の郷土に位置付けようとした発想は、この認識の上に立ってなされた。

こうした価値判断が成立し得たのは、いずれも両者の間でイデオロギーに偏ることのない関係性を構築する意識があったことに多くを負っている。一九三二年の弾圧においても郷土史家が身を案じたのは、数年来に渡って誠実に郷土調査を行う橋浦への配慮と同時に、その民俗学者を今後も「画会」を通じて支援していく意思表示でもあった。しかも彼らの判断基準は、この地における橋浦との交流体験から引き出されたものであり、その成立背景からいって、五島における久保清が橋浦に見せた対応に通じるものであった。東筑摩郡の場合、それまでに柳田国男によって開拓されていた人脈の強さがあったことを加味する必要があるものの、それとて大正初期から柳田が頻繁にこの地を訪れ、絶えず胡桃沢をはじめとする郷土史家と交流した中から積み重ねられたものであり、関係が構築される様式を異にしているわけではない。付言すれば、自身の郷土を基準に同時代の政治動向を見据えようとする意識が東筑摩郡の郷土史家に顕著であった。一九三三年初春、「長野県教員赤化事件」が起こった際にも、胡桃沢は松本・東筑摩郡からの検挙者はほとんどなく、当地では民俗学が「尚古的」と当局から捉えられており、その普及を橋浦が担っていると当局は把握してるため、案じるには及ばないとした上で、「此地方の教育界といふものは一つの訓練を経て居り極右傾にもならぬ代り又極左傾にもならず　しかもしつかりとした本筋を意識しつゝ歩いて居る」[19]と書き送ったが、この「訓練」の基軸となったものこそ、橋浦を迎え入れたこの地の郷土史家に共有された意識でもあった。

① 胡桃沢友男『柳田國男と信州』（岩田書院　二〇〇四年）　二八五―二八六頁。

② 橋浦泰雄「忘れえぬ畏友たち（3）――信濃の巻――」（『信州白樺』第二三号　一九七六年）　八三頁。胡桃沢が小学校時代、『相互扶助論』の翻訳（前半部）者であった山本飼山と級友だったことも、親交を深める理由となった（橋浦泰雄「信州雑記――山本飼山君を憶う――」『信州白樺』一三号　一九七五年　二五～二六頁）。

③ 一九二九年四月二一日付　胡桃沢勘内から橋浦泰雄宛書簡（鳥取県

立図書館所蔵)。

④「昭和四年四月　橋浦泰雄畫會のこと」(成城大学民俗学研究所所蔵)。

⑤一九二九年七月三〇日付　胡桃沢勘内から橋浦泰雄宛書簡(鳥取県立図書館所蔵)。

⑥「話をきく會の經過」(謄写版　成城大学民俗学研究所所蔵)〔　〕内引用者。

⑦一九二九年七月三〇日付　胡桃沢勘内から橋浦泰雄宛書簡(鳥取県立図書館所蔵)　前掲。

⑧一九三二年六月二四日付　池上隆祐から橋浦泰雄宛書簡(鳥取県立図書館所蔵)。この書簡は砧村喜多見の柳田邸から発信され、札幌で橋浦が逗留していた実兄・小谷義雄の住所へ届けられた。この時の札幌滞在中橋浦は七月一六・一七日と「橋浦泰雄邦畫展覧會」を行っている。

⑨『東京朝日新聞』一九三二年六月一九日、同六月二〇日。

⑩一九三三年九月七日付　矢ケ崎栄次郎から橋浦泰雄宛書簡(鳥取県立図書館所蔵)　〔　〕内引用者。

⑪「橋浦泰雄畫會　昭和五年九月」(パンフレット　鳥取県立図書館所蔵)。

⑫「橋浦泰雄陶畫番茶器の頒布に就て」(パンフレット　鳥取県立図書館所蔵)。

⑬一九二九年七月三〇日、胡桃沢勘内から橋浦泰雄宛書簡　(鳥取県立図書館所蔵)。

⑭橋浦泰雄「一九三四年日記」(手書き　鳥取県立図書館所蔵)。

⑮同前。

⑯橋浦の最初の著書となった『東筑摩郡道神図絵』(郷土出版社　一九三一年)の序文には、同書があくまで暫定的なものであり、近く『東筑摩郡誌別篇』の「道神誌」の形で完全版が刊行予定であると書かれてあるが、実現されることなく終わった。

⑰橋浦泰雄「忘れ得ぬ畏友たち(2)――矢ケ崎奇峯先生――」『信州白樺』第二二号　一九七六年　七一頁。

⑱橋浦泰雄「忘れ得ぬ畏友たち(1)――矢ケ崎奇峯先生――」『信州白樺』第二一号　一九七六年　九七頁。

⑲一九三三年三月一四日付　胡桃沢勘内から橋浦泰雄宛書簡(鳥取県立図書館所蔵)。

小　括――「民間伝承の会」の成立――

一九三五年七月三一日から八月三日にかけて柳田国男の還暦を記念して開催された「日本民俗学講習会」は、講師陣に折口信夫、あるいは岡正雄ら文化人類学者が配され、互いの学風・棲み分けが明確にされたことで、数年来続いた学界上の対立がようやく解消されたことを示唆していた。また、各都道府県から二三名ずつ聴講者として参加した郷土史家が各地の民俗事例を紹介しあう「座談会」の時間が別途設けられており、全国の民俗が眼前で比較総合される稀有な空間を提

供した。この「座談会」を通じて各郷土史家間でこれを機会に民俗学の全国組織を結成する意見が日増しに強くなり、橋浦、そして大阪から出席していた宮本常一の細かな根回しによって、八月三日の「座談会」終了後、設立に関する柳田の了諾を取り付けることに成功し、ここに「民間伝承の会」が結成される。

会期終了後、「木曜会」主要メンバーを中心に「民間伝承の会」の組織方針が討議されるにあたって宮本が各地に会の支部を作ることを提案したところ、即座に橋浦が反対し、すでに各地で多くの郷土研究会が活動していることを重視すべきであるとして、以後これが会の組織方針として定着した。[①] ここに到るまで郷土研究をめぐってなされた橋浦の経験を傍らに置けば、これはそれまで自身が交流した郷土史家との経験の蓄積から弾き出された組織方針でもあった。郷土研究、民俗学が民間習俗という経験の堆積した層に分け入りながら、採集活動を行うことを基調とするならば、それらを組織する手立てもまた、各郷土における郷土史家と直接交流することを通して得た経験の積み重ねていく様式が有効となる。在来の郷土研究会をそのまま活用させようとする橋浦の提案は、この様式を活かすことのできる枠組みを保証するものでもあった。そこで想定された郷土史家とは、自身の郷土の中で民俗事象そのものを直視することができ、同時代の政治動向に左右されない気質の持ち主であった。橋浦にとっては、こうした気質の郷土史家を相互に連関させる機構こそ、「民間伝承の会」に待望される組織であった。

この組織論に基づく場合、中央で事務を統括する側は絶えず各地の郷土史家と一対一で遣り取りを行うことが求められる。一九三八年九月から戦時下の休刊を挟んで約一〇年間、橋浦は自宅を発行所としながら会の機関誌『民間伝承』の編集を続けるが、膨大な郷土史家からの書簡が示す通り、この組織方針をこなしていく。戦時下の柳田民俗学が数少ない実証的な思考の場となりえた理由の一端はそこにあるといえる。その柳田民俗学を支えた組織こそ、郷土研究という経験の中で得られた橋浦の確固たる思想像であった。

① 宮本常一「橋浦さんのこと」（『鳥取民俗』第二号　一九七九年一二月号）　二九頁。

本稿は平成二〇年度科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号二〇五二〇五九六による成果の一部である。書簡の引用をお許しいただいた御遺族の方々に感謝する次第である。

（早稲田大学文学学術院准教授）

severe restrictions on use of their land, but these issues no longer attract the attention of the international mass media.

Focus on the rainforest issues has shifted from the land conflicts at the ground level to the 'environmental politics' at the global level, but local issues in Sarawak have been neglected and forgotten without any resolution. This has been a tragic epistemic turn for indigenous peoples in Sarawak.

The Experiences of Hashiura Yasuo in His Neighborhood Study (1925-1934)

by

TSURUMI Tarou

If you look at the local history studies from the viewpoint of Modern Japanese Minkangaku, which is the studies on the minds and private lives of the Japanese people, you will realize that, from the late 1920's to the mid 1930's, many study groups and local history researchers that were scattered across Japan began reorganizing themselves step by step, aiming to establish Minzokugaku. During the time period, Yasuo Hashiura, who was a socialist and folklore researcher, was contributing to Yanagida's reorganization activities in many ways, and then, Hashiura also left several personal items, such as his fieldwork notes, journals of local history and folklore, and letters exchanged with several local history researchers. By using these items, we were able to closely examine the characteristics of the local history societies that had been formed during the period of the reorganization. Then we investigated the local history images that the local history researchers had created during the period. However, at the time of our investigation, we also turned the spotlight on the following point. In order to associate what is called "local history", which has been a well-organized academic field, with other concerned institutes and researchers, we have to consider how the idea of the local history can work in order to form and represent human natures.

Unlike the other socialist activists who worked in the 1920's, Hashiura was capable of judging other activists, depending on how sincere they were. Naturally, he was able to receive a position free from the human struggles caused by Anarchism and Bolshevism of the time. Later on, when he carried out fieldworks as a folklore researcher, this position enabled him to contact the local people without mixing up

politics with his researches. This attitude also made Hashiura build up non-ideological trust between those people and him. When he performed researches at Goto, Nagasaki prefecture in 1928, and at Higashi Chikuma-gun, Nagano prefecture at the beginning of the 1930's, he became acquainted with several local history researchers. And later, they sent him letters in order to show their concerns about Hashiura's safety, every time they became aware that the government had been rounding up socialists in Tokyo. In short, the relationship between these local history researchers and Hashiura represents the following two characteristics. Hashiura's research methods that were based on the accumulation of his experience in the local history led directly to everyone's good relationship. The methods also enabled everyone to develop their trust relationship, regardless of their political thoughts.

In August 1935, a nationwide folklore organization, Minkan-densyo no Kai, was established, complying with the guidelines Hashiura had prepared. He suggested that research groups working locally should form a side-by-side configuration without making affiliated society anywhere, even though some people were willing to create affiliated societies throughout the country. Hashiura successfully drove away their movements. Most importantly, his guidelines emphasized that local history researchers should trust each other and work together in order to single-mindedly perform their visiting researches. In other words, Hashiura finally created the guidelines based on his ten-year experience of the local history research.